

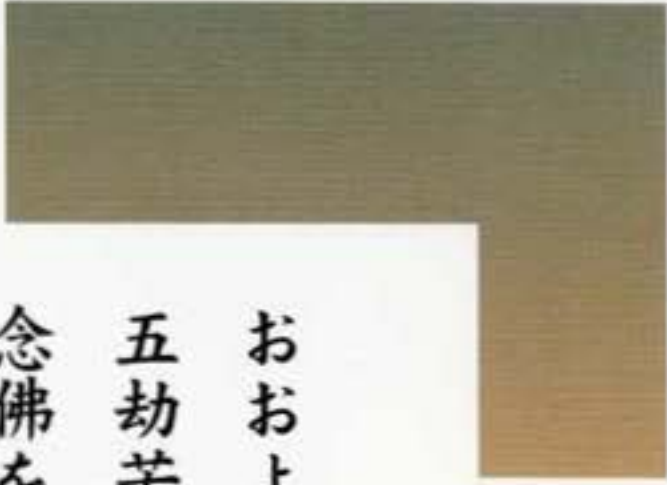
浄土

monthly
JŌDO

11

November 2007





おおよそ念佛を謗する者は、地獄におちて、
五劫苦を受くることきわまりなし。

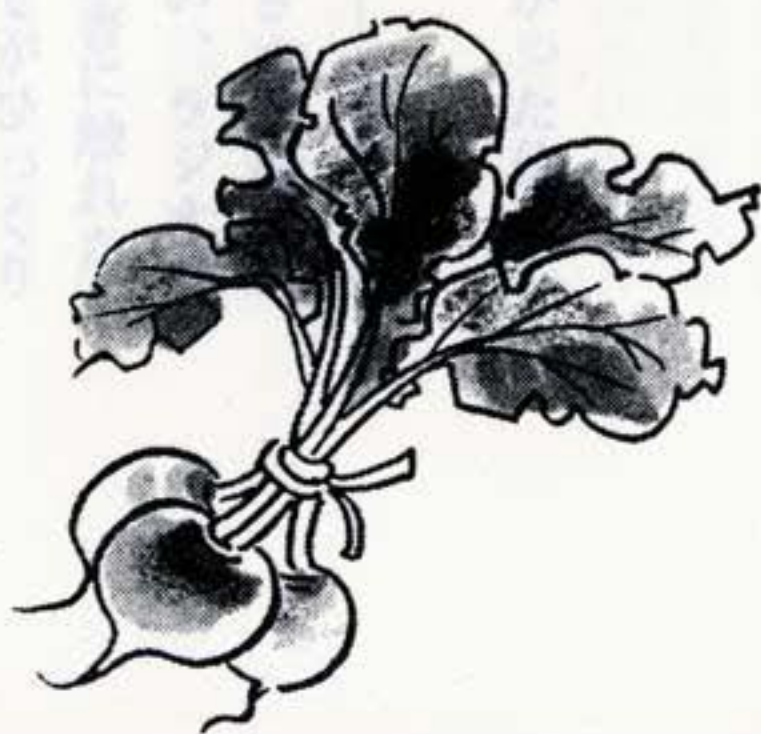
念佛を信ずる者は、浄土に生まれて、無量楽
を受くることきわまりなし。

このむねを深く信じ給うて、二心なく、お念佛
を申させ給うべきものなり

浄土

2007/11月号 目次

国内開教奮闘記	笠原泰淳	2
法然と親鸞(その二)	田島 栄	10
表紙の言葉	桜井良夫	17
会いたい人 加藤武さん②	関 容子	18
響流十方	小村正孝	26
法然上人とその時代 壇の浦へ	石丸晶子	30
江戸を歩く 第十一回	森 清鑑	36
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48
教えと法話.....	生野善應	



表紙題字=中村康隆前浄土門主
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

国内開教

奮

闘記

国内開教使
林海庵住職

笠原泰淳



人生の節目

人生にはときおり、大きな節目がやって来る。

私の場合、最初の節目は学生時代にやって来た。それまでまったく縁のなかった仏教に触れ、ものの見方が一八〇度変わってしまったのである。

それ以前は、知識や経験を積み重ねることによって人間的に成長してゆく——それこそが人生の重要事だと信じていた。というより信じる信じない以前の、決まりきった前提だと思っていた。卒業後の進路をマスコミに決めていた私は、マスコミ塾に通い、ラジオやテレビ番組の構成のアルバイトに精を出していた。だが、ふとしたことで仏教書に触れた。「苦」「無我」などの（私にとっては）とても新鮮な教えに接し、自分のすべてがひっくり返ってしまったのである。自分を借りものの知識で飾り立てても、まったく無意味なのだ、と知った。

卒業し、運送業界に就職した。そして、自分の中にある超俗性への志向と、一方では会社人間として責任感を全うしようという、二重の内面生活を送ってきた。八年間はそれで何とかやってきたが、あるとき平衡が崩れ、第二の節目がやって来た。

私は会社を退職し、家内とともにインド、ネパールに旅に出る。旅から帰って来ると、次の進路を仏門に求めた。当時浄土門の教えに惹かれていた私は、菩提寺がちょうど浄土宗であった関係で、菩提寺の門をたたき、入門を許して頂くことになった。

二年半のちに晴れて加行成満、僧階を頂くことができた。師僧に紹介して頂いたおかげで、東京芝組の心光院に奉職することができた。心光院の当時のご住職であられた戸松

啓真上人が鎌倉光明寺に晋山されることが決まっております、寺務が多忙になるので、職員を求めておられたのだ。

心光院に勤務し、卒塔婆の書き方、袴のたたみ方や香炉の灰の掃除の仕方からお檀家への接し方など、手取り足取り教えて頂いた。傍ら、また新しいことに取り組んだ。「いのちの電話」の活動である。寺院に勤めていれば檀信徒の相談にのる機会はたくさんあるが、体系的、集中的、実践的な学習がしなかった。自分の宗教観や体験は、果たして人生に追いつめられた心悩む人々への助けになり得るのか。期せずして、ここで第三の節目を経験した。自分の持っていた宗教観は、直接的にはほとんどまったく役に立たなかった。詳しくは書かないが、ここでもまた諸々の学習の中で、自己イメージが完全に崩れ、心が開くとはこういうことなのか、と知る強烈な体験を得た。

そうこうしているうちに約十年が経った。前置きが長くなって誠に恐縮だが、国内開教について書くこととすると、それはこれまで歩んできた道の延長上にある活動であるとはつきり分かるので、面倒でも自分自身を振り返らざるを得ないのである。

第四の節目——次なる（自己への）チャレンジは、新しい寺院の建立だ。

新寺院の建立

浄土宗東京事務所（当時）が本格的に国内開教施策に取り組んでゆく、という話であった。参画してみないか、というありがたいお誘いを頂き、直ちに着手した。諸々のデータから、東京都多摩市・稲城市を候補地に決めた。両市合わせて人口は約二二万、浄土宗寺院は一か寺しかない。しかも多摩市はニュータウンの中心地区であり、地元の方よりも他

所から移転してこられた方が多い。ということとは、「うちはもともと浄土宗」という方々が一定割合おられることは確実だ。とりあえず仮の拠点（賃貸マンション）を決めて、転居した。

半年後、阿弥陀さまのご尊像を迎えた。ま新しい仏像であったが、その存在感は圧倒的であった。このとき、新しい寺院の方向性が決まった。

お寺の中心は、この阿弥陀如来像になる。自分がこの阿弥陀さまに対して、心の底から手を合わせ、念仏することができるならば、あとは自然に、なるようになる。信徒になって下さる方が現れればそれもよし。現れなければ、それもまたよし。「開教寺院建立」が仮に夢と終わっても良いではないか。そういう気持ちになった。

礼拝の目標回数を決めた。十万回だ。三年くらいで目標が達成されるであろう。石の上にも三年——その頃には、開教が成功するにせよ失敗するにせよ、ある程度の様子がはっきりしているはずだ。

何せ全く初めての土地だ。知り合いも一人もない。場所は賃貸マンションの一室。立派な阿弥陀如来像に、浄土宗教師がひとり。そして家内。

隣近所に挨拶に行く。「かくかくしかじかで、少し音や声がするかも知れません。ご迷惑なようでしたら、すぐに言ってお下さい」。万一、管理事務所に苦情がいったら、困る。即活動停止だ。

初年度の終わりの時点で、信徒は二軒だった。いずれも、たまたまご縁で私が葬儀を勤めたお宅だった。それぞれ何度か来庵され、一緒にお勤めをした。

年度が明け、（平成十四年）四月になった。浄土宗国内開教委員会の委員の方々、浄土

宗東京事務所（当時）の所長、東京教区の教区長がそれぞれ視察にみえる。助成金を頂けることになったのだ。誠にありがたい限りだが、これは同時にプレッシャーでもあった。結果を出さなくてはならない。だが、どういう結果を出さなければならぬかさえも分らなかった。通りを歩き、既存の寺院が目に入ると、自分の現在の状況とのあまりのギャップ（あたりまえだが）に、気分が悪くなることもあった。血尿、血便が続くこともあった。

とにかく宣伝から始めなくてはならない。この場所に浄土宗の布教所がありますよ、こういう活動をしていますよ、ということを経験の方々に知って頂かなくてはならない。電話帳に載せ、ホームページを開設し、リーフレットを印刷してタウン誌に折り込んで配布した。こういうときに助成金が支えになる。まとまった宣伝投資に、通常のやりくりから支出するのは大変だ。

ちらほらと反響が出てくる。二年度目の終わりには、信徒名簿は五十三軒に増えていた。いつしか、実にめまぐるしい日々を過ごすようになっていた。新しい課題が次から次へと押し寄せてくる。宗務庁や教区への報告書、税務署への提出書類、責任役員会の議事録、寺院会計の開始、もちろん信徒向けの文書、手紙、Eメール、ホームページに載せるQ&A……作成しなければならぬ文書が山のようにある。「お念仏の会」をスタートさせる、法務も増えてくる、帳簿の記帳……慣れてくればこなせるのだが、初めは何でも大変だ。そこへ、大きな課題が持ち上がって来た。

「基本財産——土地建物の取得」

もちろん、それは開教寺院の大きな課題ではある。だが、当時資金的には到底無理な話で

あった。自分の中では「土地が買えるのは早くても大遠忌の頃かなあ」と思っていた。宗務庁の担当者からは「五年くらいで何とか……」と言われていたが、「それは無理。宗の方で貸付金の制度でも作ってくれたら話は別だけど」とかわしていた。

だが、何と貸付金制度開設に向けて、関係の方々が動いて下さっていたのだ。同じ国内開教使であった埼玉の自然寺藤木上人が、貸付金制度設立のための嘆願書を上げられ、宗務庁、開教振興協会が動き始めていた。考えてみると、確かにそうだ。仮に適当な不動産物件が見つかったとしても、「すみませんが、浄土宗に融資の制度ができるまで、契約を待って下さい」というわけにはゆかない。良い物件であればあるほど、即決できなければ他人の手に渡る。

そしてこの時期、ある話が耳に入った。多摩市に在住する信徒さんがこう言われたのだ。「お寺を建てるといっても、私の生きているうちは、無理ですよね」。

さあ、「はい、そうですね」と手を拱こまねいているわけにはゆかぬ。

まったく不思議なことに、ほどなく、これ以上は望めまい、という物件が現れた。

仲介業者に急せかされるようにして、契約の運びとなった。開教振興協会の理事会は四ヶ月後。貸付金制度はまだ本決まりではない。もし理事会で議決されなかったら、新寺建立の望みが露と消えるばかりか、違約金一一五〇万円を都合して支払わなければならない。

宗務庁社会国際局の担当課長に感触を尋ねてみる。

「どうでしょうか。貸付金は頂けそうでしょうか」

「……理事会の決定事項なので、何とも言えませんね。だめだったら、誰かが首を吊らなければならぬかも。私はそれは嫌ですから」

「私だって嫌ですよ！（血尿、血便の次は首吊りか！）」

「……ですから、努力はしましょう」

気が気ではない四ヶ月であったが、幸いに貸付を受けることができた。

新築は資金的に無理だったので、改修工事の計画を立てる。ちょうど多摩市内の信徒の中に建築士の方がおられ、相談した。「やりましょう」と言ってお下された。

ところが、何度か打合わせをしたのだが、どうもはつきりしてこない。全体像が見えないのだ。私自身、本堂についてはある程度具体的なイメージがあったが、それ以外はあまり明確でなかった。

そんなある日、この建築士さんが晴れやかな調子のメールをくれた。

「私は映画『阿弥陀堂だより』のビデオを持っています。それをもう一度観てみました。これでいこう、と思い立ちました。新しいお寺は、『平成の阿弥陀堂』のイメージで創りましょう」

なるほど。いや、正直言うとはよく分からなかったが、「そうですね、それは良い。それをお願いします！」と返事を書いた。

やがて、驚くような新寺ができた。小さいながら、伝統的な和風の温かみとモダンの調和した、素晴らしいお寺だ。この寺なら「どうぞ皆さん、お越し下さい」と胸を張って言える。来られた方もきつと喜んで下さるだろう。

以前は寺の看板も出せなかったが、今度は大丈夫。「浄土宗林海庵」の看板の刻字を、信徒の皆さんに彫って頂くことにした。皆さん喜んで参加して下さい。転居前には、皆さんで掃除をして下さる。「新しいお寺のスタートに立ち会えるなんて、こんなありがた

いことはありません」と、口々に言って下さった。

この新寺院に越して来たのが平成十七年九月。当初のマンションに越して来た時から、四年三ヶ月が経過していた。

この間の私の心境は、以下のようなものだった。

「自分は今、激流の中にいる。川の上流から、たくさんの丸太が流れてくる。その丸太の上を次から次へと跳び渡りながら、上流に向かって進んでゆく……」

だが皆さんにお渡しする名刺の裏にはこう書いてあった。

「仏事・信仰相談や、家庭・職場の悩みごとなど、静かな心で対応いたします」

ちなみに、当初発願した礼拝は思うように進んでいない。まだ一、二年かかるであろう。

法然上人鑽仰会

公開講演会

法然と親鸞

脚本家

田島 栄

その

二

前進座の『法然上人劇』は、昭和五十七年の七月に京都で幕を開け、八月から九月にかけて東京のよみうりホールで一ヶ月の公演をいたしました。そして翌年は、一年がかりで北は北海道から南は九州まで全国で上演しました。この間公演した場所は五十三都市、公演の回数は二百四回、二十五万人にも及ぶ方々に見ていただきました。ありがたいことでございます。

しかし、あの時から二十五年の歳月が過ぎ去っています。

戦後六十二年、私は今ほど人間の心が荒んだ時代はなかったと思います。

やさしさ、あたたかさ、他人のことを思いやる気持がどんどん失われてゆく、家族や世代の間の断絶がひろがっていく、力の強い者が幅をきかし、弱い者貧しい者がいじめられる……、ことに殺人事件の多さには眼を覆いたくなります。明るいニュースなんて百に一つでもあるのでしょうか？

私たち昭和ひとけたの世代の人間は、軍国主義教育でしごきにしごかれ、戦後は腹をへらして野良犬のように街をさまよってきました。しかし今よりはましでした。少しの夢と心のゆとりがありました。また下町の人情や、家族の絆、食べ物や自然を尊ぶ美德も残っていました。

現代の青少年は、いやお年寄りも、あの頃よりもっときびしい、歪んだ現実の中に放り出されて生きていると思います。

こんなに世相が混乱した原因の一つには、われわれ現代人が日本の歴史や文化を学ばず、よい伝統を次の世代に伝えていないということにあるような気がします。

明治以来の欧米崇拜、脱亜入欧の風潮に流され続けて来た上に、敗戦後はその傾向がさ

らに強まっています。そして東洋古来のものを侮り、目先ばかりの新しさ、西洋的なものばかりを追いまわして、自分の父母や先祖たちが残してくれた大切なもの、すばらしいものを忘れていのではないかと痛感しています。

社会の進歩のためには外国のよいものを学ぶことが大切でしょう。しかし悪いものまで真似る必要は全くありません。

西洋の合理主義の根元は、自我の確立、個人の自由にあります。それは一面では正しいとは思いますが、個人主義が行きすぎると、何もかも自分本位に考えて、自分さえよければ他人のことなんかどうでもよいということになってゆきかねません。

私は今の社会に一番欠けているのは、他人のことを思いやる心、やさしさと、謙虚さだと思っています。

そして、まわりの大勢の人びとに、笑顔と奥ゆかしさをよみがえらせたいと願っています。

どうしたらそれが出来るのか……、なにか方法はあるはずです。ばらばらになってしまった人たちの心をつなげる道が……。

私は日本人の心のふるさは仏教の中にあると信じます。

「和を以て貴しとなす」仏教の精神、すべての生きとし生けるもの、自然をも大切にすることには、永遠の真理がちりばめられていると思っています。

ことに法然上人の唱えた本願の念仏は、あらゆる仏典の中から選びに選びぬかれた真実の結晶だと思います。

私たちは法然上人の教えと生き方をもっと学ばなければならぬ。そして法然上人とい

う名前さえも知らない大勢の人びとに伝えていかなければならない。

このことこそ今の荒んだ世相に和やかな希望の光をもたらしことになるのではないでしようか。

だから劇団で法然上人と親鸞聖人のお二人を描いた劇を上演したいという企画が上ったとき、「この劇だけは私が書く」と強く主張しました。

私は劇団に入ってから五十年になりますが、「どうしても私が書きたい」と申し出た劇は『法然上人劇』と今度の二本だけです。もう一本、親鸞聖人の晩年を描いた『続・親鸞』という作品に台本協力という仕事で参加しています。

今から八百数十年の昔に、「人間はすべて平等である。男女や身分や貧富や、知恵学問の有る無しによる差別は一切あってはならない」とおっしゃった法然上人。

師の教えを受け継ぎ「われらはみんな御同朋御同行、父母兄弟である」と語られた親鸞聖人。

このお二人の教えと歩んだ道を……

『法然と親鸞』という劇にして全国の大勢の方々に見ていただく……。私にとって生涯こんな嬉しい仕事はありませんでした。

しかも、浄土宗、浄土真宗本願寺派、真宗大谷派の三つの教団が「念仏はひとつ」と手を携えて、全面的に後援して下さい。ありがたいことです。

脚本は平成十六年の十月から研究に入りまして、十七年六月十五日の文芸部会で『法然と親鸞』プロローグとエピローグのある三幕十二場の構想を語ると、私の手帳に記録してあります。それから約二年かけて四回書き直しました。この間、他の劇は一本も書いてお

りません。新聞や雑誌などの印刷物にも他のことは一行半句も書きませんでした。「法然と親鸞」という劇だけに私の全力を出し尽しました。ここに、第五稿目を手直しして印刷した本番用の台本がございます。

今、吉祥寺の前進座では、法然上人役の中村梅之助や親鸞聖人役の嵐圭史をはじめ、俳優やスタッフ達は、この台本を手に稽古のまっ最中です。

そして七月十三日に京都の南座で初日の幕を開け、翌平成二十年三月には名古屋の中日劇場、二十一年二月には大阪の国立文楽劇場、そして十一月と十二月には東京の青山劇場で公演いたします。その間をぬって全国巡演を続け、二十二年まで四年間、三百回の公演を目標にしております。

では、ここで話を変えて、「法然と親鸞」という劇のあらすじと内容を、この台本の場面の順序にそって、お話させていただきます。

劇は三幕にわかれています。第一幕は法然上人が主役です。第二幕は法然上人と親鸞聖人のお二人が主役です。第三幕は親鸞聖人が主役になっています。

では「法然と親鸞」——プロローグとエピローグのある三幕十二場の劇をはじめます。

開演を告げるベルが鳴り、荘重な音楽で幕が開くと、嵯峨清凉寺の釈迦堂の場面です。

七日の間、お堂に籠り、熱心にお祈りする若き日の法然上人の姿が光の輪の中に浮かび上ります。

「なぜだ、なぜ父は死を前にして敵を許す心になれたのか。なぜだ……。まことの道を求めよとの父の遺言、世の人のしあわせのためにつくせとの母の言葉……。私は父母の願いをはたそうとけんめいに修行した。およそ眼にふれるかぎりのあらゆる仏典をむさぼり読

み、すぐれた師のもとで学んできた。しかし、悟りどころか得たものは迷いばかりだ。他人のことどころか、自分一人がどう生きてよいのかもわからない。南無釈迦牟尼仏——。私、法然房源空は九歳のみぎり父を失い母に別れ、美作国は菩提寺に赴き、さらに叡山に登りてみ仏の教えを学んで参りました……。幾度か挫けんとする心をはげまし、聖教をひもどき修行にはげむといえども、かれも難くこれも難し。むなしく無明の闇をさまよい、悲しみ歎くばかりにございます」

堂内には、乱世にあえぐ民衆の、み仏に救いを求めるひたむきな姿がありました。戦場で敵を殺した男、夫や息子を殺された女、飢えに苦しむ者、貧しさゆえに赤子を捨てた女、人を傷つけ欺した男……。彼らはこの世を呪い、犯した罪のむくいで地獄へおちることにおびえて歎き悲しみ、問いかけます。

「お坊様、私たちはみんな地獄へ落ちるのですか」「どうしても救われないのですか」「仏様は助けて下さらないのですか」「教えて下され」……。

二十四歳の法然には答えることができませんでした。しかし、民衆とのふれあいの中で知りました。

「苦しみ悩んでいるのは自分だけではない」

そして、現在の自分の原点となった、幼い頃の悲しい思い出を回想します。

場面は変わって、漆間時国の館となります。

法然上人は、今から八百七十四年前に美作国久米南条稻岡庄（現在の岡山県の誕生寺の地）に生まれました。子供の頃の名前を勢至丸といいます。父はこの地方の豪族で漆間時国、母は秦氏という名族の出身です。

勢至丸が九歳になったある夜のこと、日頃から時国と仲の悪かった明石定明あかしただあきらという男が部下をひきいて襲って来ました。勢至丸はけなげにも弓矢をとって闘いますが、不意をうたれて味方は敗れ、時国は重傷を負い、もはやこれまでと遺言します。

「勢至丸、よく聞くのだ。お前は決して敵を恨んではならない。もし恨みをもって敵を討てば、その子はまたお前を恨んで生命を狙う。討ちつ討たれつ、人の恨みは幾世にも及んで続くであろう。お前は恨みを捨てて、私の菩提を弔いながら、人としてのまことの道を求めてくれい」

すばらしい言葉です。今こそ、世界中のすべての人びとに伝えたい思いです。こういうよい話を私たちが子供や孫たちにしっかりと語り継いでいけば地球の未来は明るくなるかも知れません。本当に時代を超えてますます価値を高めていく真理がこの言葉の中にはあります。法然様は後のちまで「父の遺言忘れがたく」とおっしゃっています。

法然様の父親は立派でした。しかし、私はそれとともに、夫を失い、ただ一人の我が子とも別れなければならなかった悲運の母への思いも深かったに違いないと想像します。

勢至丸はさぞ悲しかったでしょう。敵が憎かったでしょう。だが、悲しみの中で人間の命の尊さを知ったでしょう。憎しみにもたえながらも、やがてはそれを超えて人間を愛することの大切さを知っていたのでしょう。そして、自分の不幸をかえりみればみるほど、万民の幸せを願わずにはいられなかった法然様。法然上人は一生父母のことを忘れなかったし、その父母は死ぬまで我が子に限りない愛情を注ぎ続けました。ですから私は、浄土宗の教えは、子を思う父母の慈悲の心から生まれたと解釈して、以前の『法然劇』をつくり、今度の『法然と親鸞』の脚本を書きました。(つづく)

表紙の言葉

え
桜井良夫

11月

百万遍

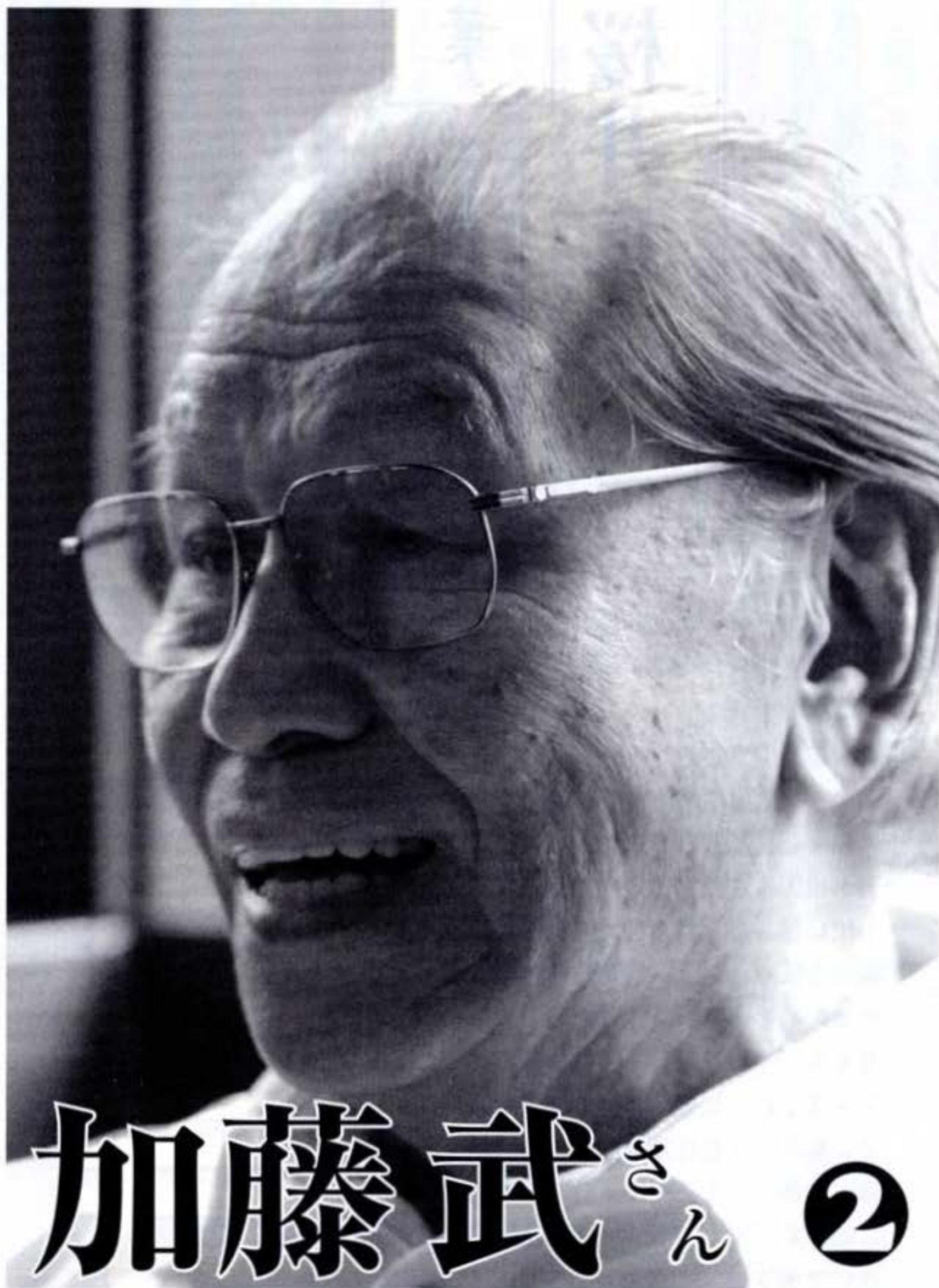
知恩寺

法然上人の常侍、源智上人は平重盛公の孫、備中守師盛卿の子である。平家滅亡後法然上人の弟子となり、上人滅後その遺徳を守り師徳報恩のため大師の影堂を建立した。

元弘元年八月、第八世善阿上人の時、天下に疫病が流行し、上人は勅命により参内し、百万遍念佛を修したところ、疫病忽ち止んだという。天皇は感激して、弘法大師御作利剣の名号と百万遍の号を贈った。その後足利義満が相国寺を建立するに当り、寺基を一条通小川に移した。第九世大譽慶竺は花園天皇に叡信を蒙り、浄土一宗第一寺の称、並に香衣被着の綸旨を賜わる。くだって天正十八年寺基を更に寺町、現梨木神社付近に移した。寛文元年正月、二条殿よりの出火に類焼し、ために第三十九世光譽満霊上人、寺地を現在の地に定め、自ら江戸に下り、五百両を得、更に諸国に行脚し、延宝七年に至り遂に竣工。次いで漸次諸堂、庫裏等建立し、全山完備。今日に至っている。

連載

会いたい人 関 容子



加藤武^{さん} ②

撮影／タカオカ邦彦

加藤さんが「新劇」に初めて出会ったのは中学二年のとき。生まれ育ったのが築地だから、歌舞伎座も築地小劇場もすぐ近くにあり、芝居とは縁の深い土地柄なのだ。

「遊び仲間に近所の歯医者の子がいて、これは育ちのいいお坊っちゃん。遊びに行くと、ねえやさんが紅茶とケーキをしずしずと捧げ持ってきたりする。その家の隣りに築地小劇場はあったんですよ。夕方、帰りがけにそこの前を通ると灰色の建物にチラホラと人が入っていく。入っていく人もなんとなく灰色っぽくて（笑）、どこか気難しそうでね。本を小脇に抱えて度の強い眼鏡をかけた学生ふうとか、そんな人ばかり」

加藤さんは不思議に思い、帰るとすぐお母さんに訊ねてみた。

「あれは何の倉庫なのか、って訊いたのよ。するとおつかさんが、あすこも芝やをすることにだよ、って。え？ あれも芝居小屋なの。それにしちや派手な絵看板もないしね、歌舞

伎座とのあまりの違いにびっくりして、中ではどんなことやってるのかと、興味がわいてきた。するとチャンスが巡ってきて、ある日母の友だちの和菓子屋、喜津禰のお婆さんのところへ届け物を頼まれた。行くと店の人が、今、小劇場の売店に行ってるからそっちへ回ってくれ、って。教わった通りにくぐり戸から入って売店まで行ったら、お婆さんが、ちよいと覗いて行くかい？ って言ってくれて、渡りに舟で客席にしのびこんで、驚いたね。眼と鼻の先に役者がいて、時代物なのに現代人みたいにしゃべってるのを、ベンチに座ったピツシリのお客が食い入るように見てる。顔のつくりも歌舞伎のように眉毛や眼はりをきつく描いてないで、ごく自然。舞台には坊さんと侍と武家の女房が出ている場面。ずっとあとでぼくが文学座に入ってから、龍岡晋さんにあのかき坊さんの役で出てたかどうか訊ねたら、たしかに出てた、って」

だとするとその芝居は『勤王届出』（丹羽



昭和44年の「富島松五郎伝」で無法松を熱演する加藤武さん

文雄原作、森本薫脚色、岩田豊雄演出）で、侍役は三津田健、女房役は杉村春子。偶然まぎれこんで最初に垣間見たのがこのメンバーというのは、よくよくの因縁だろう。

「あるとき、ちよつとお使いに出てそのまま観続けるわけにもいかないんで、途中で出てきてしまったけど、親に叱られるの覚悟で終りまで観ておけばよかったと思ったな。その後、少し間があつて、昭和十九年には自分から率先して観に行つてる。文学座公演の『怒涛』（森本薫作）。でも、窓口に行列して、ぼくの直前で切符が売り切れた（笑）。その年の秋、ようやく入れて、これも文学座公演の『鳥獣合戦』（飯沢匡作）だった。なぜ文学座ばかりかと言えば、戦時下で新築地も新協劇団も強制的に解散させられていたんです。しかし文学座だけは取り立ててイデオロギーの目立たない芝居をしてたんで、上演できたんだね」

『鳥獣合戦』も、本当は当時の日本の立場を

皮肉る諷刺劇だったのだが、イソップふうのメルヘン仕立てを装って検閲をうまくかいくぐっていた。

「整形手術して羽根を取って獣になったつもりが鳥からも獣からも相手にされなくなるコ―モリの役が森雅之さん。つまり日本の立場を表していた訳だ。面白かったね。これにカナリアの役で出てたのが堀阿佐子。ムチツとした美人で、学生時代の小沢昭一が熱を上げてた人。あとで杉村さんに聞いた話だと、そんな童話劇ふうのカナリアの役なのに、彼女はどんなふうにかナリアは鳴くのか、その生態を一生懸命研究するんだって。何でも物ごとをつきつめて考える人だったそうだ。可哀そうに若くして自殺してしまった。演劇の世界って、やっぱりちよつと危険なところがあるんだね」

加藤さんの麻布中学時代の友だちには、小沢昭一、仲谷昇、フランキー堺、大西信行な

同じ「富島松五郎伝」。当時の新聞では三幕目「祇園太鼓」と四幕目「節分の夜」が絶賛された



どがいて、早稲田大学では北村和夫、今村昌平などと一緒だった。だから劇界に誘いこまれるキツカケには事欠かない環境だったが、加藤さんはまずは中学校の教師の道を選ぶ。

「新宿の大久保中学校の英語の先生。一年坊主にABCから教えるんだけど、やっぱり俺は芝居の道に進みたい。その欲求不満があるから、授業でハーン『怪談』なんかを芝居っ気たっぷりに朗読したりして、彼らには妙に印象に残ってるようですよ。教師は一年で

辞めたんだけど、今でもひと握りの教え子たちがぼくの芝居観にきてくれます。有難いことにね」

加藤さんはやはり我慢できずに、文学座の門を叩く。昭和二十七年のことだった。

「ぼくが受けようとしたときは、養成所みたいなのがなかったんで、まず裏方で入った。何でもいいからめぐりこんじゃえ、入りやあどうにかなるだろう、ってんで、大道具かっいだりしてました。翌年また養成所が復活して、そこで加藤道夫さんとか芥川比呂志さんに教わりましたよ。そのころ飯島匡先生が『還魂記』の帝役に抜擢してくださった。長岡輝子さん演出の、魂が入れ替るという洒落たコメディ。でもこれアトリエ公演で、本公演じゃないんです。とにかく北村和夫には二年遅れをとってるけど、向うは『女の一生』の栄二とか、『欲望という名の電車』のスタンレーとか、トントントン拍子のスタートで、ぼくとは雲泥の差でしたね。仲谷昇もあの通り

いい男だったから、どんどんいい役がついたしね」

そのころ加藤さんは、中学校教師時代の同僚だった女性と結婚する。

「ぼくが文学座に入って食うや食わずの生活だったんで、彼女が先生を続けてずっと支えてくれましたね。ずいぶん世話になったのに、不幸にして先立たれました。平成八年、癌でしたよ。もう、子供たちは独立してるし、ぼくは一人暮らしが長いんです」

加藤さんに最初の主役が来たのは、昭和四十四年の『富島松五郎伝』だった。映画では『無法松の一生』として有名な作品。

「新劇の團十郎と言われた丸山定夫さんの松五郎役が素晴しかったそうなんだね。広島で原爆に遭って亡くなった、名優の丸山定夫さん。文学座に丸山さんが客演で来て松五郎をやったとき、杉村さんが吉岡未亡人役ですよ。節分の夜、しみじみと奥さんと松五郎が語り

合って、最後に思い余って奥さんの手を握っちゃう。松五郎はそれっきり奥さんの前に二度と現れない。その場のその手の握り方が毎回違つて、杉村さんはその度にグリーンとくるんだって。その話を俺の楽屋に来ちゃあ、毎日のように言うんだよ。ほんと、丸^{がん}さんのがよかったのよ、ほんとによかったの、って。松五郎の俺の前で云うのだからもうやんなっちゃつてね(笑)。俺、楽屋でシヨボンとしてた」

加藤さんは丸山定夫の名優ぶりを何本か映画で観て、知っているという。『坊ちゃん』の山嵐とか、『男の花道』の古川ロッパの医者に難題をふっかける殿様とか、『忠臣蔵』の吉良上野介とか。

「そりゃ、うまかった。存在感があつてね。あの人の松五郎ならきつといいに違いない。でも杉村さんも俺のやる気が失せるほど褒めることもないでしょうよ。見兼ねて江戸っ子の田村秋子さんがね、まあね、お春さんはあ

あ言うけど、あんたはあんたなりにやればよ

ござんしょ？　なんて江戸弁で慰めてくれるの。このときはもう女優は引退してましたけど、田村さんのいる回りにはしよっちゅう涼風が立つてるみたいなのがあつて、好きだったねえ」

田村秋子は夫の友田恭助と共に文学座創立(昭和十一年) 当時からのメンバーなので、杉村春子の先輩だが、友田が早くに戦死してからは、女優さんが続けていく意欲を失くしてしまったようだった、と何人もの人から聞いている。

「俺もそうだけど、江戸っ子というのは弱いところがあるんだよ。しっこしがない、というのかな。田村さんの芝居は三越劇場で、『牛山ホテル』とか『姫岩』とか、『稲妻』とか、毎日、裏で観てたけど、うまいなあ、と思いましたよ。『稲妻』は、座敷の明るい障子の前に杉村さんと二人でいて、亭主の悪口の言いつこするの。中村伸郎さんと宮口精二さんがその亭主でね。真船豊さんの、理詰め

じゃなくてほのぼのとした、いい芝居だった」

加藤さんの江戸っ子気質については、盟友の小沢昭一さんがこんなふうに書いていた。

「武^{たけ}さんは生粋の江戸人、というより江戸土着民。もつと言えは江戸の土人だ。……大体、新劇なんていうのは、ウダウダと物わかり悪くやるものなんだネ。あれは江戸土人には適さないよ。すぐホリサゲルものなんだから。武さん、だからあんたは新劇に向いてねエんだよ。……みんな何処もかしこも、田舎っぺに占領されてるんだよ。……だから気の毒に武さん。あんたもそれ知ってるから、英文科出たんだよ。洋行もしたんだよ。一所懸命、カッペったんだよ。涙ぐましいねエ」(注・原文ママ)

小沢昭一さんも東京の蒲田で育っている。

「そう、ぼくの『昭和悪友伝』の序文に小沢昭ちゃんがそんなこと書いてくれた。俺たちはダメだ、つて。世の中にカッペがのさばる、つてね。それも逆に言えば江戸もんのコンプ

レックスなんだよ。ほんとに俺たちは根性なしなんだ。飯沢匡先生が皮肉たっぷりにおっしゃってたけど、ジョウキョウ劇場だ、つて。これわかる？」

一瞬、唐十郎さんの「状況劇場」のイメージが浮ぶ。

「いやあ、上京劇場よ(笑)。劇界を牛耳ってるのは、上京してきた人たちだ、つて。杉村さんがそうだよ、上京だよ。広島から笈を背負って固い決意で出てきたんだから、強いよね。最後までゆずらない。田村さんにはなかなかああはできなかったんだと思いますよ」

(つづく)

人はすべて暴力におびえる。すべての者にとって生命は愛しい。
わが身にひきあてて殺してはならない。殺させてはならない。

（『ダンマパダ』第二三〇偈）

仏教徒として——ある日の新聞から

新聞を読んでもあまり面白いことはない。そう感じている方々は多いことだろう。新聞社が、まずこれを伝えねば、の意気込みのもと、大見出しで一面にデカデカと掲載してくるのは、贈賄だ、背任だ、殺人だと、被害者の方には大変失礼だが、正直、目を背けたくなるような記事ばかりが目立つ。朝からそんな調子だと、どうも滅入ってしまう。

そんなふうなことが度重なっていたつい先日、海外情勢を伝える小さな欄の、こんな見出しが目に入った。

「僧侶に攻撃拒み軍人亡命」

ミャンマー軍四十二歳の少佐が、反政府デモに参加した僧侶への攻撃命令を拒み、ヨーロッパへ亡命するためタイへ逃れてきたという。（十月五日「産経新聞」朝刊）

このたびのミャンマーでの出来事は、世界中に大きく報道された。豊かさにどっぷり浸かりきっている日本人の目には、大変なギャップを感じざるを得ないミャンマーという国。軍による一方的な政権、不安定な経済など、難題山積のなか起きてしまった、僧侶、民衆らによるデモという訴え行動。一方で、敬虔な仏教徒の国としても知られるかの地。もはや直訴あるのみ、との結論に至った僧侶と民衆が手を取り合うのに、そう時間は必要としなかった。仏教への

信仰深さは、皮肉なことにこの点にもうかがうことができる。

黄色い衣に身をまとった仏教僧侶らによるデモの写真を目にした者には、いろいろな意味でショックもあつたに違いない。とくに「準仏教国」といえよう日本にとっては、中東や西アジアから伝えられるイスラームにまつわる事件に比すれば、他人事とは思にくい、の感があつたのではあるまいか。まして、同じ僧侶という立場、筆者は複雑な思いにさせられた。

「僧侶たちが銃撃されて死亡したということを知り、仏教徒として許せなかった」亡命を希望しているという少佐のコメントは、私たちに大きな示唆を与えてくれる。いや、「私たちに」という受け止め方はどこか第三者的でよくない。「私に」でなくてはならない。

それほど篤信の仏教徒であるなら、なぜに軍人であるのかと指摘する向きもあろう。攻撃対象が仏教僧侶でなかったら命令に従っていたのか、といった横槍も入りそうではある。しかし、そんなことを言える義理は、少なくとも筆者には、ない。亡命という（しかも軍人の身で）、命を賭した最終行動を決意させたのは、「仏教徒として」という、たった数文字の指標であつた。この少佐というひとりの人間を、軍人以前に「仏教徒である自分」としてそのアイデンティティを確立せしめていたもの！

筆者は恥ずかしさを禁じえない。「仏教徒としてこうしたのだ」と、はつきりと言えることが、これまでにどれだけ為し得てきただろうか。

「仏教徒として」第一に守るべき不殺生戒。この戒めを破って同じ仏教徒に銃口を向けることに苦悶し、ついに亡命という行動に自己のアイデンティティの存続を託した少佐。彼はその後、どうなったのだろうか。家族はいるのだろうか。仏の大いなる加護を祈ることしか、為す術はない。

*

*

*

毎年浄土宗主催で行われている「法然セミナー」が十一月十日、東京のよみうりホールで開かれる。今年のテーマは「豊かさの先にあるもの」。昨年同様、会場には仏教国ミャンマーの子どもたちの日常を写し取った、弁護士で写真家の関口巖氏の作品が展示されるという。

彼らの、曇りなく輝く瞳と笑顔は、きつとほんとうの豊かさというものを、私たちに教えてくれるにちがいない。ミャンマーの、一日も早い回復を祈りたい。

*

*

*

二四〇字ほどのあの記事は、切り抜いてパスケースに忍ばせている。

(小村 正孝)

法然上人
と
その
時代

シリーズ第四章

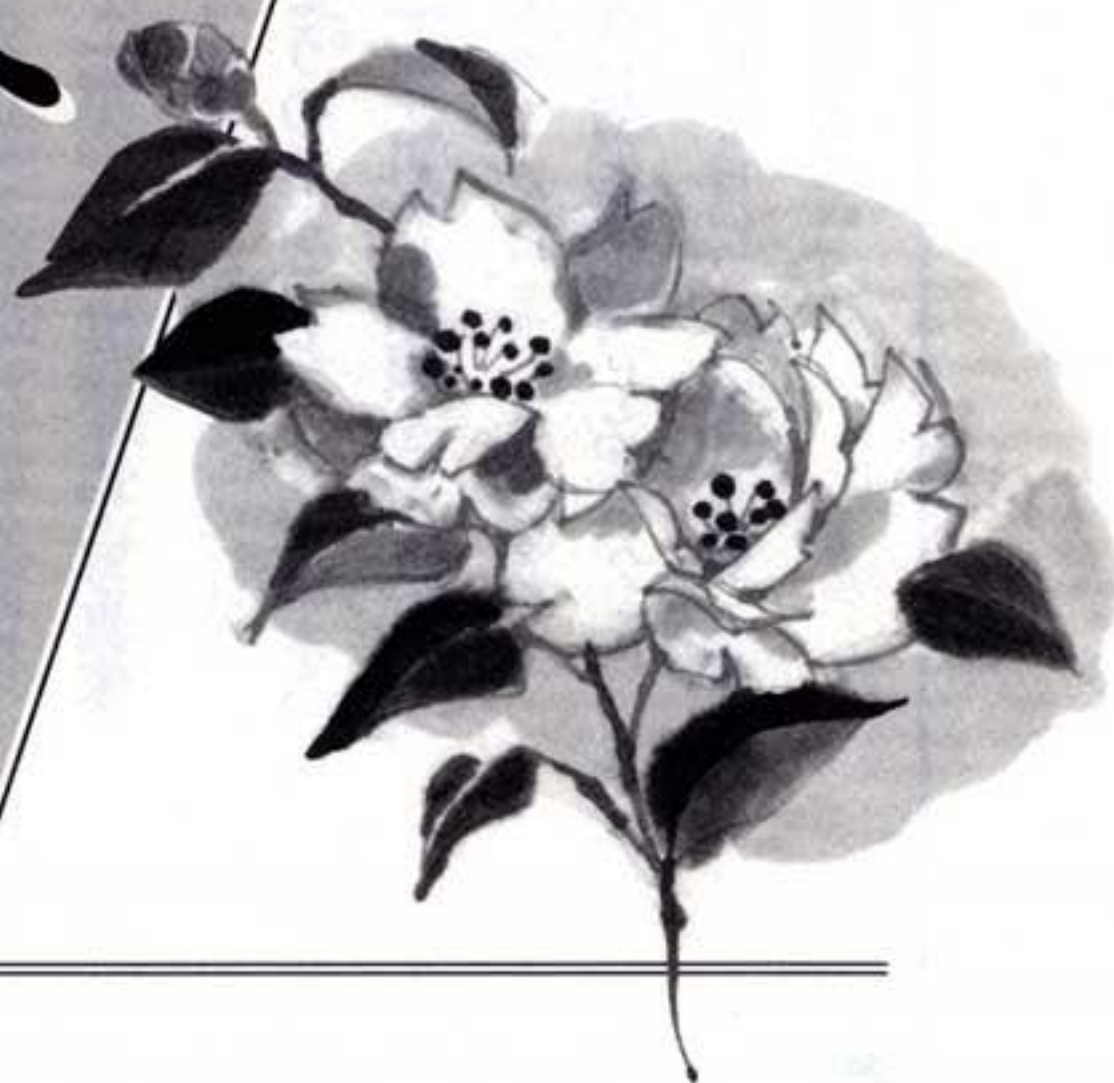
壇ノ浦へ

第一回

作

石丸晶子

画
アーサ



四

「これが他人のことでありましたならば」知盛は嗚咽おえつした。

「どんなにかわたくしは、彼を非難したに違いありませんぬ」

「いやいや、親としてはそう思いになられましようが……」

大きく息をして、宗盛も涙を頬に伝わらせながら弟に応えた。

「中納言殿にもし万一のことがあったならば、われら一門如何になりましたようぞ。中納言殿もそれをお分かりゆえ、とっさのことに落ち延びられたに違いありませんぬ」

「……」

宗盛の慰めには答えず、鎧よろいの袖を顔に当て、知盛は嗚咽し続けている。そんな弟を見て、宗盛は涙のうちに慌てて付け加えた。

「誰が中納言殿を非難いたしましたしようにぞ。一門の皆々、平家の皆々、中納言殿がご無事と知って、辛うじて安堵いたしておるものを」

「……」

「一門の望みは中納言にかかっております。これからの合戦においても、お命を愛惜いとおしんで頂かねばなりませんぬ」

塞せき上げるようにして泣きつづける知盛に、宗盛は掻きくどいた。事実、ここでもし、知盛に戦死でもされようものには、平家の宗主しゅである宗盛自身、どうすればよいのか、まったく狼狽せざるをえなかった。

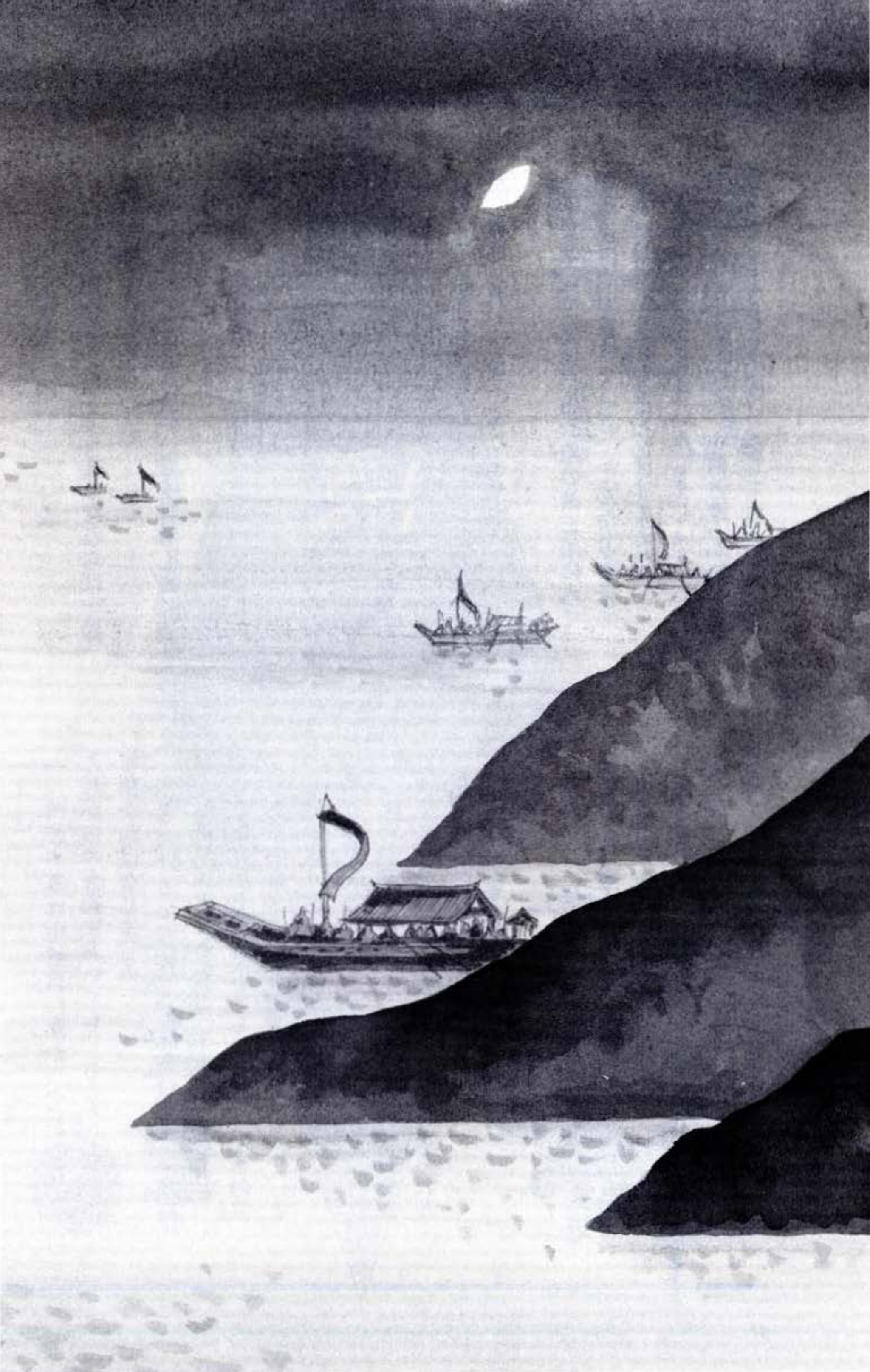
「誰が中納言殿を非難しましたようぞ。なくてはならぬ大切なおからだじゃ。それをお分かりゆえに、武蔵守むさしのも父君をお助けになられたに相違ない」

泣きながら宗盛はくりかえした。

「……」

しかし、兄のどのような慰めを聞いても、知盛の心は慰まなかった。さめざめと泣きつづ彼は自分の心に問うていた。

兎玉党の武者と馬上で取っ組み合おうとした一瞬、間に入って父に代り、その武者と組み合った息子知章ともあきら。そんな息子に対して、父



である自分は、真実、味方平家の行く末を思
つて逃げようとしたのであったか。

——いや、あの一瞬、自分は父であることも、
平家の大将であることも念頭になく、ただ死
の恐怖にかられ、生き延びたい一心で修羅場
を逃げたのではなかったか。

「武蔵守はたしか今年十六歳でありました
な」

ややあつて宗盛はことばを継いだ。

「武芸にも優れ、剛毅の気性。よき大将であ
りましたものを。口惜しうござる。口惜しう
ござる」

宗盛は傍らにひかえている息子の右衛門督^{えもんのかみ}
清宗^{きよむね}をつくづくと見つめると、

「あれと武蔵守はたしか同年でござった」

父のことばに、十六歳の清宗は顔を伏せた。
同年の知章^{ともあきら}とは幼い頃からの思い出が詰まっ
ていた。俄かによみがえった思い出の中で、
はじめて清宗の心に知章の死が現実のことと
して押し寄せてきた。

押し寄せる悲しみのなかで、清宗は声を上

げて泣いた。

嗚咽の聲が船中の人々の間に広がっていっ
た。

五

生き残った平家の人々は海に逃れ、海上を
船に乗って漂うことになった。

一の谷の浜辺や須磨の浦の西方、あるいは
芦屋の沖あたりに漕ぎ出して波に漂う船もあ
り、明石海峡を島がくれにゆく船もある。ま
だ須磨浦の沖合いに漂う船も見られた。

瀬戸の海の浦々島々には、数多くの平家方
大小の軍船が海に漂っていた。

一の谷の平家方副将、越前の三位通盛^{みちもり}の妻
小宰相^{こざいしやう}は、波に漂うそんな船の一つに乗って
通盛の帰還を待っていた。通盛は清盛の弟教^{のり}
盛^{もり}の嫡男。清盛の甥である。

もちろん、平家が大敗して一門の公達^{きんだち}の多
くが討ち死にした報せは、何刻^{なんとき}もしないその
日のうちに小宰相の船にも伝わり、それに続
いて、

「越前守様は討ち死にされた模様」
えちぜんのかみさま

という情報も入っては来ていた。

しかしそうではあっても、

「誤報ではないか」

と一縷の望みを抱くのは、残された者の常である。
いちる

小宰相も、

「討ち死にされたようだ」

「たしかに討ち死にされた」

等々の知らせが入ってくる中で、

「もしかするとどこかに隠れておられて、無事、生きてお帰りになるかもしれない」

「敵味方十万もの武者が入り乱れて戦った戦なのだ。誰が討ち死にしたと、はっきりしたことは分からないのではないか」

などと考え、ひいては、

「間違いでもあろう」

と思つて、一の谷後二、三日はちよつと近くに外出した夫を待つような気持ちで待っていた。事実、討ち死にが伝えられた船中の武将の中には、それは誤報で、無事帰還した者も

いた。

しかし、五日、六日と日数だけがむなしく過ぎ去り、誤報で無事生還してくる侍たちも少なくなってくると、小宰相もさすがに心細くなつていった。

一の谷から六日が経った夕べであつた。通盛の側近く仕えた郡太滝口時員ぐんだたきぐちときかずという侍が船にやつて来た。彼は小宰相の許にきて膝をつくと、涙を押し拭いながら、

「殿は今月七日朝、一の谷にて討ち死にされました。無念にございます」といった。

通盛討ち死にの戦場を辛うじて落ち延びた時員は、大混乱を呈している須磨の浦からようやく船に乗ると、通盛の奥方が乗った船を求めて平家の船から船を捜し渡り、通盛戦死後六日経った二月十二日、やっと小宰相の船に辿り着いたのであつた。

「まことか」

時員のことばを聞くや、血の気を失つて傍らの乳母の胸に倒れかかった小宰相に代わ

り、そのからだを支えながら乳母が蒼白な顔で訊ねた。

「——仔細を申せ」

六

「九郎義経、七日早暁、われらが陣を構える一の谷の背後、鉄拐てつかいヶ峰がみねを三千の馬をもつて駆け下りました。不意を突かれて味方は大混乱」

男泣きに泣きながら時員は言った。

「峰を駆け下りた源氏は火を放ち、我らは戦ういとまもなく四散して逃げ落ちました」

「……」

「殿は海を目指して落ちていく途中、源氏の武者七騎に取り籠められ、お討ち死にされました……。御首をあげた侍が名乗るのを聞けば、近江の国の住人木村きむらの源三成綱げんぞうなりつな。この時員もすぐにもそこで御供して討ち死にいたすつもりでございましたが、殿には、この度の合戦にあたって時員に申し遣わされていた御ことがあります」

涙にむせびながら彼は言った。

「その御こととは何なにぞ」

鋭い声で乳母が訊ねた。

「一の谷の陣屋にお呼び寄せになった奥方様を、船にお返しあそばした日の夜でございました。殿が仰せつけられましたことは、

『われらは暇いとまなく戦の庭に向かう身であれば、いついかなる時に討ち死にせぬとも限らぬ。討ち死にした場合、その場でわれらの後を追ひ、後世ごせの供をしようなどと決して思つてはならない。お前は生き延びて、奥方の行く末をお見守り申し上げ、お世話申し上げよ。きつと申し渡したぞ』

ということでございます。この仰せゆえに、不本意ながらもいのち永らえ、やつと今、奥方様の御前に参上いたしました」（つづく）

江戸を歩く

九品仏から目黒へ

第十一回

田園編



森 清鑑

大江戸ウォーカー

目黒不動尊

寄合旗本松井波之助の領地脇を通る道（林試の森公園）を進むと右手に稲荷があり、石川坂（石古坂）に出る。急な坂道を下ると、そこには目黒不動の門前町が展開する（昭和の初めまで、この坂の左右には何軒もの芸者屋があった）。四方を田畑、林（下目黒村、桐ヶ谷村）に囲まれた中で、忽然と大賑わいの待合や料理屋が出現する。目抜き通りは、滝前町りゅうぜんちやうといい、左右には土産物店を含めた大店もある。江戸名所図会には、この地の名物、目黒の飴、桐屋の大繁盛ぶりが描かれている。やがて右手に成就院（蛸薬師）。道は門前を左に迂回、耕地町に出る（現山手通り）。ここにもぎやかである。左手に岩屋弁天播龍寺。そのまま行けば大鳥明神社（目黒通り）である。これら門前町に囲まれた形で目黒不動堂別当滝泉寺があった。

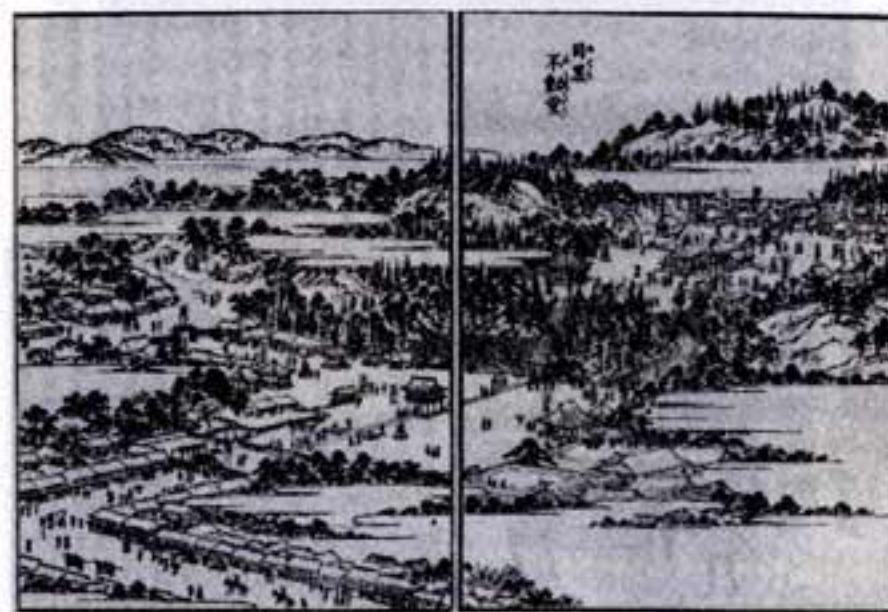
目黒の地名の起こりは、この目黒不動から、

鎌倉時代の莊園主目黒氏から、あるいは、この辺り古代から馬の牧場が多く、馬畔めぐろから来た……と諸説ある。いずれにせよ、目黒不動は、江戸五色不動の一つとして江戸中に鳴り響いていた。

「泰永山滝泉寺」。開山は、慈覚大師、八百八年。十五歳の時、比叡山に登る途中、この地で不動明王の霊夢を見、そのお姿を刻んで安置したのが始まりという。時は移り、三代將軍家光の深い信仰を得て、堂坊社五十余と



◆江戸名所図会 目黒の飴、桐屋



◆江戸名所図会 目黒不動

いう大伽藍が建立された。寛永七年、天台宗上野寛永寺の末寺となり、生順大僧正が兼務（中興の祖といわれている）。しかし、江戸庶民がこぞって参内する賑わいを招いた背景に將軍の鷹狩りがある。家光は目黒で鷹狩りを頻繁に催した。その際、当寺を行營の場とし、参詣するのが常であったから、たちまち有名となり、風光明媚な自然風景を楽しみ、かつ信仰のため、江戸近郊における有数の参詣行樂地としてにぎわいを見せるに至った。境内には家光のエピソードがいろいろと残されている。その後の歴代の將軍も見習うかのように、この地で鷹狩りをし、参詣したのである。こうして幕府の庇護のもと、目黒不動は大いなる発展を見た。

本尊の不動明王は、靈驗あらたかな上に、江戸庶民の厚い不動信仰をも招いた。目黒不動は、「江戸五色不動」のひとつとしても名高い。不動様の目の色を五色で表現するというのは、中国の五行思想の五色から来ている

といわれる（宇宙の現象は地、水、火、風、空の五つからなるという宇宙観。これらを色彩で表現したものが五色）。不動尊を身体、目の色で描く風習は平安時代にすでに存在していたという。江戸には、他に目青不動、目黄不動、目赤不動、目白不動があった。これも家光が江戸の天下太平を祈願して方角に応じ、割り当てたといわれる。目黒不動（滝泉寺）、目白不動（金乗院、江戸期文京区関口）、目赤不動（南谷寺、文京区駒込）、目青不動（教学院、青山。現世田谷区太子堂）、目黄不動（永久寺、三ノ輪または最勝寺、平井）。このうちいくつかは地名の起源に関わった。

境内の状況

「門前茶屋多し」と江戸名所図会にわざわざ書き込まれた、滝前町通りには馬や籠に乗った人々の姿も見える。両側、店に囲まれた参道。柵門を潜ると川が流れている（明治末期から羅漢寺川）。小さな橋を渡ると鳥居。そ

の先に仁王門がある。広々とした境内。東側には三仏堂（阿弥陀堂）を初めとしていくつもの方丈が東に伸びている。西側も堂宇が点在し、裏門の先には三折坂を登る人々の姿が見える。そして、正面に独鈷の滝が、開創以来、千百年余、枯れることなく、山肌から湧出し、石垣に囲まれた池に落下している。ここは、行者の水垢離場である。滝場に沿って登る急な石段が男坂。すると再び境内が現れ、中央に本堂、右側に鐘楼がある。江戸古地図では「時の鐘」を告げる刻印が記されている。本堂の裏も広く、開山堂を初め、ざっと十棟に及ぶ堂宇が並ぶ。台座と石欄に囲まれ鎮座している大日如来座像。寄進した多くの江戸の人々の名が刻まれている。背後は山波。ここからは縄文後期の遺跡が多数発掘されている。

富くじ

目黒不動の境内では、公認の「富くじ」(宝

くじ)が盛大に行われた。すなわち、元祖宝くじの現場として、同寺を江戸庶民にとっていっそう馴染み深い場にした。幕府が特定の寺社に限り、富くじの公営を認可したのは享保十五年(一七三〇)のこと。最初の認可は京都仁和寺であったという。そして文化九年(二八一二)、目黒不動と湯島天神が江戸では初めて公営の場所となった。五年後には谷中の感応寺(現天王寺)が認可され、これを称して江戸の三富という。元はといえば幕府か



◆目黒不動仁王門 初詣



◆独鈷の滝 右不動明王像



◆男坂階段を登ると本堂

ら寺社への補助金減少に伴い、修繕を含む寺社の運営管理費の工面のために幕府が認可したものである。賞金最高額は当初百両。ところが富くじ熱隆盛とともに「突き留め」（一等）一千両、「二番富」（二等）五百両という、途方もない高額に跳ね上がっている。文化、文政の頃には江戸市中方々で行われ、回数も頻繁になっている。この頃には札が町中でも売られるようになった。

境内では寺社奉行立ち会いの下、僧侶の読経が流れ、木札を収納した箱を揺すってまんべんなくちりばめ、箱の上面に開いた穴から目隠し人が長い錐を差し込み、札を突き刺す。群がった人々が固唾を呑む一瞬だ。どよめきが起こって当たりくじが発表される。

富くじは、江戸落語格好の題材となつてゐる。「富久」、「宿屋の富」など代表的なものだ。「富久」は名人、桂文楽の十八番芸。年の瀬、たいこ幫間の久蔵は、富札「松の百十番」を買い、家で一番大事な大神宮のお宮（神棚）

に札を収め、祈る。世話になつてゐる越後屋さんが火事になる。駆けつけて手伝い。火事が消えて一安心。一杯やって寝入つてしまふ。すると今度は久蔵の住まい辺りで半鐘が鳴る。急いで戻ると長屋は丸焼け。数日後、境内で富くじの抽選。そう言えば俺も一枚買つたつけ。でも火事で焼けてしまったと諦め半分で見ていると「一番、松の百十番」の声。久蔵、「あ、当たつた」と卒倒。必死に世話人に交渉するが札が無くては、駄目なものは駄目。泣く泣く火事現場の長屋に戻るととびがしら鳶頭にはばったり。「火事だつてのに、どこへ行つてやがつた。布団と釜は出しといてやつた。ああ、それから立派な大神宮様のお宮（神棚）もな。おれの家に置いてあるよ」。久蔵半狂乱になる。事情を聞いた鳶頭。「千両富の当たり札とは、狂うのも無理はねえ」。下げは「へえ、これも大神宮様のおかげです。近所にお祓い（お払い）をいたします」。

比翼塚

現在、目黒不動仁王門前の左手に、白井権八（本名 平井権八）、小紫を供養する比翼塚がある。この塚は、江戸時代、石川坂（石古坂）を降り切り、滝前町通りに入る左手、東昌寺の境内に在った（明治四年廃寺）。権八は、吉原で遊女小紫と恋仲になり、吉原に通う金欲しさに多くの辻斬り強盗を働いた。奉行所手配となり、一時、東昌寺の和尚に身柄を確保される。改心し、虚無僧となって国元の鳥取に帰るが、両親は既に無く、覚悟して江戸に戻る。そこで捕らえられ、鈴ヶ森で磔刑。亡骸は東昌寺に葬られた。これを知った小紫は、吉原から抜け出て、東昌寺に赴き、権八の墓前で自害する。小紫の純愛は、江戸の人々の哀れを誘い、歌舞伎、浄瑠璃あるいは人情話に取り上げられ、江戸中で評判となった。歌舞伎では、権八は、腕が立つ美貌の若侍として描かれ、鈴ヶ森で、彼にからんだ

雲助達を切り払う場を見て感心した、幡随院長兵衛の名セリフ「お若えの、お待ちなせえやし……」、それに応えて権八の「待てとお止めなされしは……、雉も鳴かずば討たれまいに……」で有名である。

小紫が自害したとき、心配して不動前まで来た、かむろ（幼い時に遊里に売られた少女で花魁に付く）は、近くの道で暴漢に襲われ、池に飛び込み、命を落としたという。村人は、これを哀れみ、いつしか、この道を「かむろ坂」と呼ぶようになった（現在も同じ）。江戸期では、目黒不動仁王門前の参道をまっすぐ南に行き最初の四辻、第六天社を左に曲がった坂である。第六天社の先は、ちよつと行くと畑で遮られ、その向こうには火屋（桐ヶ谷斎場）があった。

青木昆陽

目黒不動尊の裏手（北側）の小道を東に少し歩くと、古くから在る滝泉寺墓地の一部が

ある（現在の海福寺の背面）。ここに甘藷先生、青木昆陽（一六九八―一七六九）の墓がある。石囲いの中に母親と娘さんの小さな墓もある。昆陽は、晩年、富士を望む景勝地、目黒を愛し、近くの大鳥神社の裏に別邸を設け、ここで没した。生前、庭の片隅に自ら「甘藷先生墓」と記して建てていた墓石である。昆陽は、江戸日本橋生まれの儒者であり、蘭学者でもあった。しかし、なんといっても、サツマイモの栽培で有名である。町奉行大岡越前守忠相と深い関係にあり、彼の推挙で幕政に参加する。八代將軍吉宗の命でサツマイモの栽培に乗り出す。小石川御薬園（五代綱吉の別邸跡、現小石川植物園）で試作を開始。その後、千葉九十九里、幕張でも栽培に従事している。関東にサツマイモを持ち込んだ功労者である。「藩藷考」（藩藷Ⅱ甘藷）を著し、その普及の大きな原動力となった。その後、サツマイモが幾多の飢饉、食糧難に寄与したことは云うまでもない。晩年は、幕府評定所

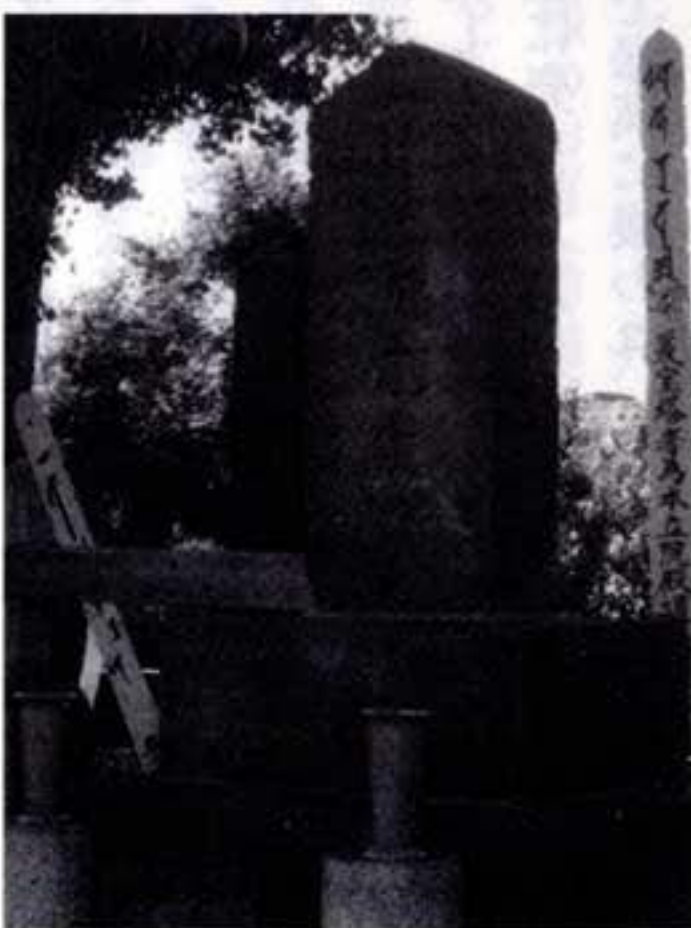
儒者となり、オランダ語の習得に努め、蘭学の始祖となっている。弟子には『解体新書』で知られる前野良沢がいる。

不動尊では、甘藷先生の遺徳を偲んで、毎年十月、「甘藷まつり」が盛大に開かれ、境内には露店が軒を連ね、芋をほおばりながら歩く人の姿が見られる。墓前には、サツマイモや花が供えられる。

◆比翼塚



◆甘藷先生の墓



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●山

〔特選〕**霊山の湧き水涼し胡麻豆腐**

井村 善也

山自体が信仰の対象になっているのもあれば、山頂や山腹などに寺社があり、それによって崇められているものもある。御水洗の水はもちろん、いま食べている胡麻豆腐も、この湧き水で作っているのである。

〔佳作〕山の影映して湖の冬に入る

金谷 友江

山の端の夕日に白し花薄

石原 新

半島の小山鵜が占め風秋へ

鈴木 猿公

●字

〔特選〕**テロップにまたも誤字ある夜長かな**

内藤 隼人

テレビを見てみると、流れて来たテロップに誤字があった。それはそのまま画面を通り過ぎて行く。しばらくするとまた誤字が見つ

かる。誤字が出たところで一々訂正する訳ではない。こうして秋の夜は更けて行く。

〔佳作〕丸文字の添え書き太く梨届く

河合富美枝

絵文字入れ残暑見舞いのメールかな

浜口 佳春

一文字を念入りに書く盆提灯

山口 信子

●自由題

〔特選〕恙なくいて夏痩せのはじまりぬ

寺下 忠至

今年の夏は殊に暑く、一年の半分は夏になったと思われるほど長かった。それでも夏ばてもせず食欲もある。それなのに何となく痩せたように思う。夏痩せは始まっているのだ。気をつけねばならぬ。

〔佳作〕松手入れして一服の空高し

佐藤 雅子

風呂上がり大きく使う浣团扇

中村 真一

丸描いてけんけん遊び秋海棠

谷 しげ子



量舞自由題

兼題
(季語ではありません)

浄土誌上句会のお知らせ

締切・二〇〇七年十一月二十日
発表・『浄土』二〇〇八年二・三月号
選者・増田河郎子(『南風』主宰)
応募方法
●いづれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。
宛先
〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

山

色鳥や山また山の日溜りに 河合富美枝
朝市や幾種の茸山盛りに 中島富士子
案内札傾ぐ山路や滝の音 細田 初枝
山盛りの下は歪な林檎かな 柏木 貞華
右側は日陰となりし秋の山 柚木 掉
山鳩の鳴き声重し朝曇り 大倉 智子
ざわざわと山喋らせて夏の風 村上 青女
またひとり茸山から自衛隊 西原 規夫
山隠す手品師のふと秋あわれ 根津 信彦

字

大書して夢の一字やさやかに 中島富士子
冬座敷かたみの刻字「花意竹情」 金谷 友江

秋の灯やルーペ頼りの漢字引く 佐藤 雅子
冷まじく母という字を貫く棒 和田 仁
字余りの人生きのこ御飯かな 村松 芳郎
新秋や字画に頼る子の命 井村 善也
松茸や大字、字と書かれをり 袴田 阿形
読めるけど書けない漢字秋の風 西原 規夫
アラビアの文字は右から曼珠沙華 柚木 掉
字余りの短歌がくねるさるすべり 目黒 裕

自由題

博多帯きりりと師匠夏衣 細田 初枝
オカリナの速音に酔ひし月の客 河合富美枝
秋立つや通院予定表に丸 金谷 友江
雲水とすれちがひたる秋の雨 中島富士子
ジーンズに穴あいてゐる夜長かな 青山 亜子
天高し貰ひ煙草の煙はく 西原 規夫
つかぬこと聞けば夜長の道となる 内藤 隼人
為るように為れ草風草風 和田 仁
秋の蟻すこし歩いてまたとまる 目黒 裕
線香の煙の乗りし秋の風 柚木 掉
野に咲けば野の色となる藤袴 柏木 貞華
家ごとにコスモス咲かせ岬の村 池田 伊吹
いい汗を拭う出会いや顔と顔 東 保

さっちゃんね

45

かい

かまちよろう



編集後記

冬隣りふるえるばかりの池の月 岱潤

先月あった裁判で、自殺した男性に労災認定が下された。上司による執拗な「給料泥棒だ」「存在が目障りだから消えてくれ」「お前のカミさんも気がしれん」「会社を食い物にしている」…これらの暴言と自殺との因果関係が認められたからだ。

言葉は時には凶器となり、相手を死にまで追い込んでしまう。そして言葉の怖さは、語る側、使う人間に凶器と違い、相手をそこまで傷つけている意識がはたらかないことだ。

最近宗内の雑誌に著明な布教師の法話

録が掲載され、その中の譬喩で用いられた落語の使われ方に批判が寄せられた。「愚かさに関りなし」と題された法話の中で、目の不自由な男が夜道を歩くのに提灯を持つが、その提灯が消えていることに気付かず、前から来た人にぶつかってしまふことを、愚かさには喩えたもので、身体的障害を笑いの種にする落語を、法話の中に取り入れてしまい、見えていない事実を愚かさとしてしまった。

言い放された言葉も恐ろしいが、文章化した文字となった言葉はその数倍恐ろしい。編集に携わる者として、傷つく人

がいないか細心の注意を払いながら、本作りをしていかなければと、肝に銘じて考えている。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkan-jodo.info>

浄土

七十三巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷

平成十九年 十月二十日
平成十九年 十一月一日

発行人

佐藤良純
大室了皓

編集人

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四 明照会館内

発行所

法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七

FAX 〇三(三五七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

大光普照

大光普く照らす
無量寿経

生野善應

亜細亜大学講師
東京高輪・光福寺住職

太陽は普く照らして一切を育む。
かくの如き人も在らん。

合衆国の地図を眺めると、大統領ワシントン、リンカーン、ジェファソンの名の都市があちこち十市以上あります。独立戦争に勝ち、原地民を初め、言語、習慣の違った諸民族を統括し、憲法を起草、建国を達成した大政治家への敬意と賞賛の表れでしょう。

しかし、フランクリンは都市名の数で大統領に並びます。自然科学、社会運動、外交、政治、文

学の分野で第一級の業績を残した人。科学を尊び、自由を尊重し、合衆国建国に貢献した、模範的な大きなアメリカ人の彼を国民が敬愛しているからです。「フランクリン自伝」には、自分に厳しい宗教者の一面もみられます。

二十五歳の時、十三徳を定め、生活の指針としました。

法然上人鑽仰会の



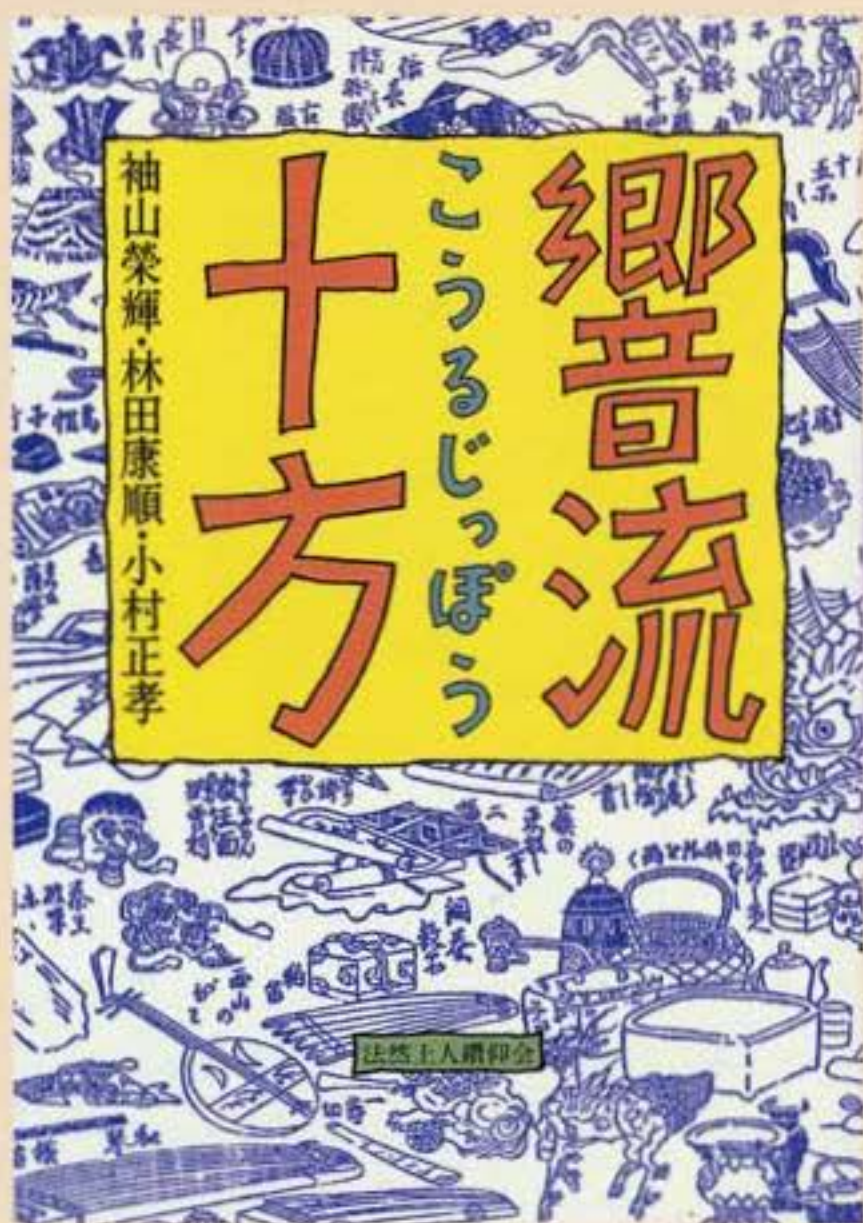
当会発行の書籍、雑誌
のお求めは、当会へ直接
お申し込みください。

なお、月刊『浄土』を除き送料は
含まれておりません。別途実費を
申し受けます。

法然上人鑽仰会

電話／03-3578-6947

FAX／03-3578-7036



響流十方こうるじっぽう
600円(税別)

『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円

※額装寸法 47×59cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット)800円



※浄土宗大本山増上寺蔵
『法然上人絵伝・残欠二巻本』より